

広島大学学術情報リポジトリ  
Hiroshima University Institutional Repository

Title	古典に見えるセロリ
Author(s)	水谷, 智洋
Citation	プロピレア , 26 : 60 - 72
Issue Date	2020-12-30
DOI	
Self DOI	
URL	<a href="https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00050161">https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00050161</a>
Right	Copyright (c) 2020 日本ギリシア語ギリシア文学会
Relation	



## 古典に見えるセロリ

水谷 智洋

今年のお正月頃、何となく口にしたセロリがひどく気に入り、しばらくのあいだ、一本のセロリが朝食の欠かせないメニューという日がつづきました。「メニュー」といっても、適当な大きさに切って適当なドレッシングをかけるだけの一皿ですが、古典屋の習癖として、古代人もこの「口福」にあずかっていたのだろうか、という疑問が湧きました。セロリといえば、何年か前の本誌で、どこかの競技会の勝者に授けられるリースの素材であった、とチラッと言及した覚えがあります。ひょっとしたら、セロリはまた彼らの食卓におなじみの野菜だったのかも……。しかしこの期待は、百科事典によりあっけなく打ち砕かれました。あの茎の太いセロリは15～16世紀まで存在しなかった、というのですから。でも、調べればなにか興味深いことが出てくるかもしれない。あきらめの良くない私は、例によって例のごとく、探索活動を開始したのです。以下はその御報告ですが、今回はコロナ禍のため十分な調査ができませんでした。その辺をお含み置きのうえ、お目通しください。

はじめに、『大百科事典 8』（平凡社、1985）、622頁のセロリの項目（高橋文次郎氏執筆）の一部を引用し、その下に『世界有用植物事典』（平凡社、1989）、99頁の図、および小川鼎三他編、鷺谷いづみ翻訳『ディオスコリデスの薬物誌』（エンタプライズ、1983）、365頁のSELINON KEPAlONの図（512年頃の「ウィーン写本」中の植物画を複製したものという）をそれぞれ図1、図2として掲げておきます。図1は現在の、図2は品種改良以前のセロリという訳です。

**セロリ** *celery* : *Apium graveolens* L.

葉柄を食用とするセリ科の一・二年草。オランダミツバともいい、園芸ではセルリーという。全草に強い芳香を有する。葉は複葉で、太くて長い葉柄を有し、2~3対の3~5深裂する小葉と項生葉とからなる。葉柄は直立集合して大株となる。夏に50~100 cmの直立した茎を出し、小さな複散形花序に微細な花を多数つける。花は白色あるいは緑白色、果実はやや球形で小さい。野生系統は地中海沿岸や中部ヨーロッパからインドまで広く分布し、海岸近くの多少塩分のあるところ、石灰分があって湿気のあるところに好んで生育する。栽培化は地中海東岸域で始まったらしく、エジプトですでに利用され、ギリシア・ローマ時代にも薬味や香料として使用されていた。しかし葉柄が現在のように野菜に利用されるようになったのは15~16世紀になってからである。17世紀にはフランスで葉柄食用品種が栽培されていた。

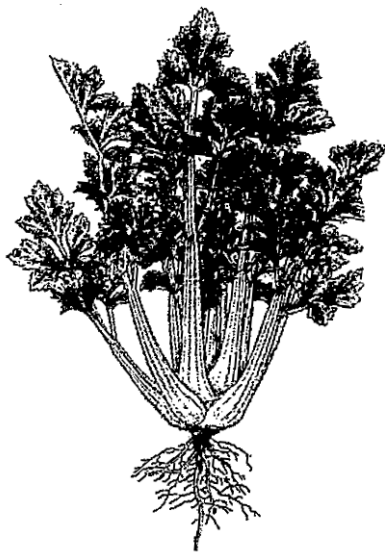


図 1

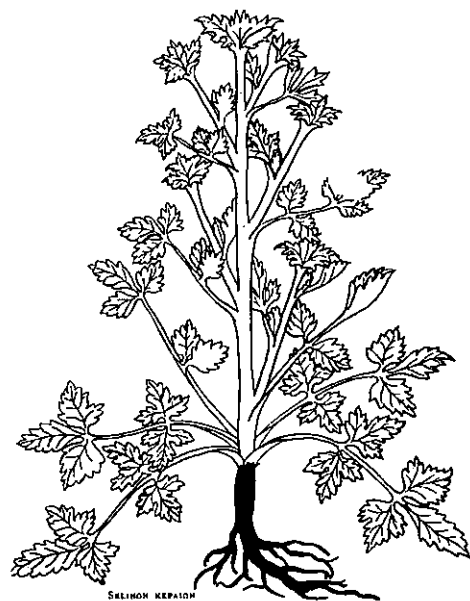


図 2

上記により、セロリの学名がわかります。*Apium* が属名、*graveolens* は「強い匂いのする」という意味の種小名。ところが *Oxford Latin Dictionary* で *apium* を引くと、‘The name given to a number of species of plants, incl. esp. celery, also parsley, etc.’とありますから、これでもってセロリのための学名と了解してもよいのやら、命名者の Linné 先生にお伺いをたてたいところです。次にギリシア語ですが、σέλινον (i は長音) です。幸い、*LSJ* は *celery* 以外の植物を挙げていません。

さて、植物学の祖テオプラストス（前 371 頃～287 頃）の『植物誌』のなかに、σέλινον の字が何度となく出る一節があります。

(1) Theophrastos, *peri Phytōn Historia* (lat. *Historia Plantarum*) 7.6.3

τὸ δ' ἵπποσέλινον καὶ ἐλειοσέλινον καὶ ὄρεοσέλινον καὶ πρὸς ἑαυτὰ διαφορὰν ἔχει καὶ πρὸς τὸ ἡμέρον· τὸ μὲν γὰρ ἐλειοσέλινον τὸ παρὰ τοὺς ὄχετους καὶ ἐν τοῖς ἔλεσι φυόμενον μανόφυλλον τε καὶ οὐ δασὺ γίνεται, προσεμφερὲς δὲ πῶς τῷ σελίνῳ καὶ τῇ ὄσμῃ καὶ τῷ χυλῷ καὶ τῷ σχήματι.

「馬セロリ」と「沼セロリ」と「山セロリ」は互いにも、また（それぞれの）栽培種とも異なっている。すなわち、水路のそばや沼に生育する「沼セロリ」は、葉は貧弱で密生していない。けれども（栽培種の）セロリとは、いくぶん、匂い、味、形が似かよっている。

「馬セロリ」は学名を *Smyrniium olusatrum*、英語では alexanders というセリ科の 2 年草の由です。一つとばして「山セロリ」は、学名 *Petroselinum sativum*、これがパセリ、残る「沼セロリ」の学名は *Apium graveolens*、これこそセロリです。この、いわば「野生種の」セロリは、τῷ σελίνῳ と匂い、味、形が似ているとありますが、この τῷ σελίνῳ には当然、ἡμέρω という形容詞が了解されており、「栽培種の」セロリを指しているに違いありません。つまり、テオプラストスでは、単に τὸ σέλινον とあれば、それは「栽培種の」セロリなのです。（なお、ここでの「種」はなんらの植物分類学的意味はなく、私が便宜的に使っているだけのことです。）

それでは、σέλινον の初出はといえば、やはりホメーロスでした。

(2)-a Homēros, *Ilias* 2.775-7

ἵπποι δὲ παρ' ἄρμασιν οἴσιν ἕκαστος 775  
λωτὸν ἐρεπτόμενοι ἐλεόθρεπτόν τε σέλινον  
ἔστασαν·

馬どもとても、自分らの引く戦車のわきで、  
各々蓮華草げんげやしめり地せりに育つ芹つを摘つい食ばみながら  
佇んでおり<sup>2)</sup>、

アキレウスが戦闘を忌避しているので、ミュルミドネス勢の戦車を引くべき馬どもは、所在なしにそこら辺の草を食んでいるという情景です。むろん、ここにいう「芹」が野生種のセロリです。

(2)-b Homēros, *Odysseia* 5.70-3

κρήναι δ' ἐξείης πίσυρες ῥέον ὕδατι λευκῶ, 70  
πλησίαι ἀλλήλων τετραμμέναι ἄλλυδις ἄλλη.  
ἀμφὶ δὲ λειμῶνες μαλακοὶ ἴου ἠδὲ σελίνου  
θήλεον·

いっぽうには湧き泉が、次第よろしく四筋の流れに、透澄な水を  
たがいに近く並べあい、あちらこちらと、てんでの向きにせらいで落ちる、  
あたりは一面、柔草にくぐさの牧原をなし、すみれやあるは芹せりなどいっぱい  
生えそろう<sup>3)</sup>、

カリュプソーの住む洞穴の外の叙景です。ゼウスの命をうけて飛んできたお  
使い神ヘルメースも、思わず魅了されてしまいました。

次に古い用例は、恋と酒を歌った抒情詩人アナクレオン(前510頃~485頃)  
の断片のなかに見出されます。ここではセロリがリースの素材となっています。

(3) Anakreōn 410 Page *P.M.G.* 4)

ἐπὶ δ' ὀφρύσιν σελίνων στεφανίσκους  
θέμενοι θάλειαν ἑορτὴν ἀγάγωμεν  
Διονύσῳ  
眉のうえにセロリの小さなリースをかけて  
ディオニュソスのために華やかな祭りを  
祝おう

「眉のうえにかけ」るリースとは、ひょっとすると鉢巻きのようなものかもし  
れませんが。でも、偉大な合唱隊歌の詩人ピンダロス(前518頃~438頃)の祝捷  
歌に出るリースは、まぎれもなく頭にいただく冠です。

(4) Pindaros, *Olympionikai* 18.32-4

δύο δ' αὐτὸν ἔρεψαν  
πλόκοι σελίνων ἐν Ἴσθμιάδεσσι  
φανέντα· Νέμεά τ' οὐκ ἀντιζοῖ·  
イストミアをおとずれたとき  
その頭<sup>こうべ</sup>には、野せりの冠が  
二重に環をえがいた。また  
ネメアもほまれを拒まなかった<sup>5)</sup>。

「オリュμπシア祝捷歌」第13歌は、コリントスのクセノポーンが、前464年のイストミア競技会において、短距離競争と5種競技の2種目で勝利するという前代未聞の新記録をうちたてた栄誉を称えるものです。δύο...πλόκοι σελίνωνにご注目ください。イストミア競技会での勝者に授けられるセロリの冠については、他にも *Isthmionikai* 2.15-6 Δωρίων ... στεφάνωμα κόμα / ... ἀναδειῖσθαι σελίνων 「ドーリスのセロリの冠を髪にかざられる」、8. 63-4 Ἴσθμιον ἂν νάπος / Δωρίων ἔλαχεν σελίνων 「イストミアの谷のドーリスのセロリをかちえた」と歌われています。またネメア競技会でも同様の表彰が行われたことが、*Nemeonikai* 4.88 θάλησε Κορινθίους σελίνοις 「コリントスのセロリではなやかに輝いた」によって知られます。ここで使われたセロリは、むろん、競技場近くの河辺か谷間に自生する香り高い野生種のセロリであったことでしょう。

このあたりで目を前5世紀のアテナイ、具体的にはアリストパネースの喜劇に向けてみましょう。アリストパネースにはセロリは2度出ます。

(5)-a Aristophanēs, *Nephelai* (lat. *Nubes*) 981-3

οὐδ' ἂν ἐλέσθαι δειπνοῦντ' ἐξῆν κεφάλαιον τῆς ῥαφανίδος,  
οὐδ' ἄνηθον τῶν πρεσβυτέρων ἀρπάζειν οὐδὲ σέλινον,  
οὐδ' ὀψοφαγεῖν, οὐδὲ κιγλίζειν, οὐδ' ἴσχειν τὸ πόδ' ἐναλλάξ.  
また食卓では、二十日大根<sup>はつかだいこん</sup>の根のところは、子供が取ってはいけないもの  
とされ、ういきょうや芹<sup>せり</sup>を、年長者よりも先につかみ取りしたり、また甘い<sup>うま</sup>  
ものばかり取って食べたり、くすくす笑いをしたり、足を組んでいたりす

ることも、許されなかったのだ<sup>6)</sup>。

『雲』(前423年上演)のなかで、「正論」ὁ κρείττων λόγος が「邪論」ὁ ἥττων λόγος に吐くセリフです。昔は今とちがって、子供の躰もちゃんとできていたもんだ、食事どきの行儀作法ひとつとっても...云々。ここで私の注目は、むろん、「芹」(=セロリ)です。セロリはどうやら、世間一般のありふれた食品と扱われているようです。しかも、「年長者よりも先につかみ取り」してはいけないということは、結構、高級なオードブルの一品だったのでは、と想像されるのです。なお、ἄν(ν)ηθον はセリ科の植物で和名イノンド、英語で dill、キュウリのピクルスには欠かせないハーブです。

(5)-b Aristophanēs, *Sphēkes* (lat. *Vespa*) 480

XO. οὐδὲ μὲν γ' οὐδ' ἐν σελίῳ σοῦστιν οὐδ' ἐν πηγάνῳ·  
コロス 何だと、まだ序の口にも入ってないぞ。

『蜂』(前422年上演)のなかで「蜂形の老人の群」から成るコロスの、きわめて意味のとりにくいセリフです。この1行には高津先生の注があります。「原文は「パセリと芸香にも入っていない」とあり、これらはアテナイの花壇(κῆπος)の縁取りにつかわれた草であって、「まだ話の本筋に入っていない」という意味である。」しかし、これは480行に附された古注の前半のみの注解であって、実は後半に別解があるのです。すなわち、「新生児は生まれてすぐセロリのなかに置かれた。だから、まだ何も始まってはいないの意味である。」けれども、これでは πήγανον (和名ヘンルーダ、ミカン科の常緑小低木、<sup>うんこう</sup>「芸香」は漢名)の説明にはなっていません。私としては、高津先生の注「パセリ」を「セロリ」、「花壇」を「菜園」と改めたうえで、古注の第1解を採用したいと思います。そして、ありふれた野菜である栽培種のセロリの供給源は、どこにでもある身近の菜園であった、と理解しておくことにいたします。(図2の σέλινον κηπαῖον をふり返ってみてください。)

さて、『雲』ではセロリは普通の食品のように見うけられましたが、アッティカ中喜劇の作者エウブ羅斯(前370年代に活躍)の断片では、明らかに蔑視されています。

(6) Eubulos, Cock *CAF* ii 176 (Athēnaios 8.347d) <sup>7)</sup>

φησὶν ἐν Ἴξίονι Εὐβουλος,  
ἀμύλων παρόντων ἐσθίουσ' ἐκάστοτε  
ἄνηθα καὶ σέλινα καὶ φλυαρίας  
καὶ κάρδαμ' ἐσκευασμένα,

『イクシーオーン』のなかでエウブーロス語っている。

高級パンがあるというのに、やつらがいつも口にするのは  
イノンドにセロリに馬鹿っ話。  
それに調理したコショウソウ。

これは、おそらく、菜食主義者の食事をからかっているのでしょう。なお、  
κάρδαμον は、よく知られた香辛料のカルダモンとは無関係らしく、英語の *cress*  
というアブラナ科の植物です。

次は『蜂』480 行のセロリが菜園に植えられた栽培種のそれと理解したうえで、  
そうした情景を歌った詩句をさがしてみましよう。

(7) Moskhos 3.99-101

αἰαῖ ταὶ μαλάχαι μὲν, ἐπὰν κατὰ κᾶπον ὄλωνται,  
ἦδὲ τὰ χλωρὰ σέλινα τό τ' εὐθαλὲς οὖλον ἄνηθον 100  
ὕστερον αὖ ζῶντι καὶ εἰς ἔτος ἄλλο φύοντι·  
ああ、ウスベニアオイや緑のセロリ、  
また、ねじれて繁るイノンドは菜園で立ち枯れても、  
のちにまた生を享け、明くる年には生え育つ。

モスコスは前 150 年頃に活躍したシュラーケーサイの牧歌詩人。その第 3 歌  
は Ἐπιτάφιος Βίωνος 「ビオーン挽歌」と題する 126 行の詩ですが、モスコス本人  
ではなく、ビオーンの弟子筋の作とされています。それはともかく、セロリが  
菜園で栽培されていたことがここで確認できます。なお、μαλάχη ウスベニアオ  
イはラテン名 *malva*、英名 *mallow* と呼ばれるアオイ科の多年草です。古代から  
料理に使われていました。今では花を乾燥させてハーブティーを淹れたりしま  
す。



(8) [Vergilius], *Moretum* 87-91

tunc quoque tale aliquid meditans intraverat hortum  
ac primum, leviter digito tellure refossa,  
quattuor educit cum spissis alia fibris;  
inde comas apii gracilis rutamque rigentem 90  
vellit et exiguo coriandra trementia filo.

この時分にも、(農夫は) なにかそのようなことを思案しながら  
菜園に入っていた。

まず最初に、指で軽く土を掘り、

四個のニンニクを、太いひげ根をつけたまま掘り出す。

それからセロリのまばらな葉と、まっすぐに立つヘンルーダを  
引き抜く、また弱々しい茎でふるえているコエンドロをも。

ウェルギリウス(前79～19)の頃に作られた8篇ほどの小詩を集めた *Appendix Vergiliana* 『ウェルギリウス補遺』が今に伝わっています。そのほとんどは大詩人の作とは認められていないのですが、124行から成る *Moretum* (「朝食用の手軽なサラダ」の意)は、冬の朝、貧しい農夫が目覚めてから、朝食を用意して食べ、畑へ出るまでを語る1篇です。上の5行はそのうち、農夫が菜園から野菜をとる場面です。ここで私は *comas gracilis* から推して、*apii* はパセリではなく、セロリと断定するのです。なお、*coriandrum* は英名 *coriander*、和名コエンドロというセリ科の1年草です。今ではパクチーといったほうが通りがよいかもしれません。

先に私たちはピンダロスの祝捷歌により、セロリのリースが競技の勝者の栄光のしるしとして授けられたことを確かめました。ところが、セロリのリースは、一方で、死者の墓にささげられるのがふさわしいとの証言が伝わっているのです。

(9) プルータルコス『対比列伝』より「ティームレオーン」26

そこへ登れば敵の陣営も見下ろされる筈の丘に登って行くと向こうから

セリーノンを選んで来る騾馬の群に出会った。兵士たちにはこの前兆が凶であると思われた。というのは我々が通例死んだ人の墓にセリーノンの花環を捧げる習慣だからである。そこから瀕死の病人の事をそろそろセリーノンが要するという諺まで出来ている程である。ところがティーモレオーンは兵士たちの迷信を打破し絶望を除去しようと欲して行進を停止させ、その場に適ういろいろの話をした上、勝利に先立って自分たちの手に冠がひとりでに來たのだ。コリントスの人々はセリーノンの冠を神聖な父祖伝来のものと考えてイストミアで勝利を得た人々にこの冠を授けるではないかと言った。その頃まだイストミアでは、今ネメイアで行っているように、セリーノンが冠に使われ、それが松の葉になったのはそう古い昔のことではない。さてティーモレオーンは先に述べたように兵士たちに向かって話をしてから、セリーノンを取って自分が最初に冠として戴き、次いでその周りにいた將軍たちも兵隊もこれに倣った<sup>8)</sup>。

Timoleōn はコリントスの將軍です。植民市シュラーケーサイから救援を乞われて、前 344 年、シケリアー島に渡ります。そして前 339 年、クリーミーソス川の戦いで僭主ディオニューシオス二世とカルターゴー軍を撃破します。上記のエピソードはその直前のことと思われます。

ラバの積み荷のセロリを見て動揺する兵士たちの気持ちを、指揮官は説得的な論で落ち着かせます。セロリの出現は凶兆ではない、現にわれわれの祖国コリントスの市民は、代々、イストミア競技の勝者に神聖なセロリのリースを授与してきたではないか、われわれも今、このセロリでリースをつくり、頭を飾ろうではないか、と。

セロリを凶とする「迷信」*δεισιδαιμονία* は、ティーモレオーンより少し後の人と思われるサモスの僭主にして歴史家のドーリス Δοῦρις (前 340 頃~260 頃) の発言 *τὸ σέλινον πένθεσαι προσήκει* (33 Jacoby) 「セロリは哀悼にふさわしい」にもうかがわれます。また、Plinius (23~79), *Naturalis Historia* 『博物誌』 20.113 には、いずれも前 3 世紀のストア派哲学者とおぼしきクリューシッポスとディオニューシオス兩名が、セロリを食するなど *nefas* 「罪」だ、*namque id defunctorum epulis feralibus dicatum esse* 「それは死者たちの悲しい宴に捧げられるものだから」と断言していたことが記されています。こうしてみると、この俗説ないし憶説はかなり広範に信奉されていたらしいことが察せられますが、一方、それを肯んじない証拠も見出されるのです。

(10)-a Theokritos 3, 21-3

τὸν στέφανον τῖλαί με κατ' αὐτίκα λεπτὰ ποησεῖς,  
τόν τοι ἐγών, Ἄμαρυλλί φίλα, κισσοῖο φυλάσσω,  
ἀμπλέξας καλύκεσσι καὶ εὐόδομοισι σελίνοις.  
きみは直ぐ、ぼくに挿頭<sup>かざし</sup>をこなごなにさせるだろうな、  
いとしのアマリュッリスよ、きみのためにつくったツタの髪飾りなんだ  
けど、  
バラのつぼみと、いい香りのセロリを織り込んであるのさ。

テオクリトス(前300頃～260頃)はシュラーケーサイ生まれの牧歌の創始者。  
第3歌では、ニンフのアマリユッリスに恋いこがれる山羊飼いの若者が、ツタ  
のリースを贈り物にしても受け入れてもらえそうにない、と嘆きます。それは  
バラのつぼみといい香りのセロリを織り込んだ素敵ナリースなのです。

(10)-b Theokritos 7, 63-70

κῆγὼ τῆνο κατ' ἄμαρ ἀνήτινον ἢ ῥοδόεντα  
ἢ καὶ λευκοῖων στέφανον περὶ κρατὶ φυλάσσω  
τὸν Πτελεατικὸν οἶνον ἀπὸ κρατῆρος ἀφυξῶ 65  
πὰρ πυρὶ κεκλιμένος, κύαμον δέ τις ἐν πυρὶ φρυξεῖ.  
χὰ στιβάς ἐσσεῖται πεπυκασμένα ἔστ' ἐπὶ πᾶχυν  
κνύζα τ' ἀσφοδέλω τε πολυγνάμπω τε σελίνω.  
καὶ πίομαι μαλακῶς μεμναμένος Ἀλγεάνακτος  
†αὐταῖσιν κυλίκεσσι καὶ ἐς τρύγα χεῖλος ἐρείδων. 70  
その日はまた、わたしはイノンドあるいはバラ  
あるいはまた、白スミレ(?)のリースを頭<sup>こらべ</sup>にいただこう。  
そしてプテラ(未詳)の酒を、甕から酌もう。  
炉端に横たわれれば、だれかが豆を炒ってくれよう。  
そして臥所<sup>ふしど</sup>は肘のところまで、ふかふかに敷きつめられていよう、  
ヨモギ、アスフォデル、茎のしなやかなセロリでもって。  
そしてわたしはアルゲアナクスを想って、楽な気持ちで飲めるだろう、

盃に口を押しあて、<sup>おり</sup>澱まで飲み干すいきおいで。

クレテー島のキュドーニアの山羊飼いリュキダース Lykidas はコース島で、テオクリトス本人とおぼしきシーミキダース Simikhidas と歌競べをします。上の 8 行はリュキダースのもので、「その日」というのは、彼の恋人（男性）のアルゲアナクスが、無事、レスボス島のミュティレーネーに着いたとの報せが届く日のこと。その吉報に接したらリュキダースは、頭に花冠をいただいて祝盃をあげよう、炉に近い寝床にはセロリやその他の野草がふかふかに敷きつめられていよう、という訳です。私たちはここで、アリストパネース『蜂』480 行の古注、「新生児はすぐセロリのベッドに寝かせた」を想起するでしょう。また、シケリアー島でティーモレオンたちの前に現れたラバの積み荷のセロリは、その用途を寝床に敷きつめるためと理解しておくことも許されるでしょう。セロリは、けっして、不吉な野草扱いされるばかりではなかったのです。

ローマの諷刺詩人ユウェナーリス（60 頃～128 頃）からも一箇所。

(11) Juvenalis, *Satura* 8. 224-6

haec opera atque hae sunt generosi principis artes

gaudentis foedo peregrina ad pulpita cantu 225

prostitui Graiaeque apium meruisse coronae.

高貴な生まれの君主の行状、また業績はこれこれ、

すなわち、喜び勇んで異国の舞台にのぼり、ぶざまな歌唱で

わが身を辱めたこと、そしてギリシアのセロリの冠をかちえたこと。

「高貴な生まれの君主」というのは、むろん、ネローのことです。この皇帝であれば、勝利のしるしは黄金製品を要求することもできたでしょうが、なんの変哲もない、昔ながらの野生セロリの冠にも、格別の有難みがあったということなのでしょう。

ところで、J. E. Sandys は（4）の 33 行に次のように注記しています。‘The river and the town Selinûs in Sicily derived their name from the wild celery, which grew plentifully on the bank of the river (Head’s *Historia Numorum*, p. 146, ed. 1887).’<sup>9)</sup> ここで手元の *Die Welt der Antike, Taschenatlas* を見ると、Selinus は川または町の名

として 4 箇所が登録されていました。ついでに、Pape-Benseler, *Wörterbuch der griechischen Eigennamen*, 3. Aufl. (rep. 1957)を開くと、Σελινόυς, οὔντος (ὄ)は 8 箇所も列挙されていました。煩わしいので一々引きませんが、これは野生のセロリが古代人に愛好されたいたなによりの証拠と申せましょう。好き好んで不吉視する野草名を川や町の名につける、そんな命名が方々で行われたとはとても思えませんから。

以上をざっと振り返ってみますと、古代のセロリは野生のものと栽培されるものに分けられました。川岸などに大量に繁茂していた野生のセロリは、方々の川に名を与えた他、その芳香を愛でて祝祭や競技の勝利のしるしのリースにつくられ、日常的には寝床のクッションのようにして使われました。その一方で、セロリのリースを墓にかける風習も広く存在したようですが、これは抜きがたい迷信ととらえる他はないでしょう。これに引きかえ、菜園で栽培されるセロリは、お手軽には、サラダもしくはオードブルのようにして食卓に供せられたと思われます<sup>10)</sup>。セロリは総じて古代人にきわめて親しい植物であった、これが今回の調査の結論のようなものです。

最後に番外を一つ。

(12) Carmina Popularia 6 Page P.M.G. 852<sup>11)</sup>

ποῦ μοι τὰ ῥόδα, ποῦ μοι τὰ ἴα,

ποῦ μοι τὰ καλὰ σέλινα;

ταδὶ τὰ ῥόδα, ταδὶ τὰ ἴα,

ταδὶ τὰ καλὰ σέλινα.

わたしのバラはどこに、わたしのスマレはどこに、

わたしのきれいなセロリはどこに。

ほら、バラはここよ、ほら、スマレはここよ、

ほら、きれいなセロリはここよ。

ここのセロリは白っぽい、ごくごく小さな花をいっぱいつけているのでしよう。少女たちが二手に分かれ、かわいらしい仕草で問答する情景が目に浮かぶようです。

\*\*\*\*\*

本稿作成にあたり、アリストパネースの古注の件では戸部順一氏の、ドゥーリスの断片、プルータルコス of 原典その他では日向太郎氏の御援助をいただきました。御二方に厚く御礼を申し上げます。

## 注

- 1) 『プロピレア』第24号(2018)、83頁、注18。
- 2) 訳文は呉先生のもので、呉茂一訳『ホメーロス イーリアス [上]』(岩波文庫、1953)より引用。
- 3) これも訳文は呉先生のもので、呉茂一訳『ホメーロス オデュッセイアー [上]』(岩波文庫、1971)より引用。
- 4) D. Page (ed.), *Poetae Melici Graeci* (Oxford, 1962). この断片は D. Campbell (ed. & tr.), *Greek Lyric II* (The Loeb Classical Library, 1988)にも同じ番号を付して収められています。
- 5) 訳文は久保先生のもので、『世界名詩集大成 (1) 古代・中世篇』(平凡社、1960)所収の久保正彰訳「オリュムピア祝捷歌集 (全)」より引用。
- 6) アリストパネースの訳文は『世界古典文学全集 12 アリストパネス』(筑摩書房、1964)所収のものを引用。(5)-a は田中美知太郎訳、(5)-b は高津春繁訳です。
- 7) T. Cock (ed.), *Comicorum Atticorum Fragmenta* (1880-8) は見ていません。2~3 世紀の Athēnaios, *Deipnosophistai* 『食卓の賢者たち』より引用。
- 8) 河野与一訳『プルターク英雄伝 (四)』(岩波文庫、1953)より引用。漢字と仮名遣いを現行のものに改めました。
- 9) J. E. Sandys (ed. & tr.), *The Odes of Pindar* (The Loeb Classical Library, 1968), p. 135. なお、Head の書物はまだ実見していません。古人が貨幣上にどのようなセロリのイメージを刻したか、興味津々なのですが.....。
- 10) セロリもしくはパセリを手の込んだ料理に使う例、また種を香辛料として用いる例は1世紀のローマの食通 Apicius, *de Re Coquinaria* (ミュラ=ヨコタ・宣子訳『アピーキウス 古代ローマの料理書』、三省堂、1987) をご覧ください。
- 11) D. Campbell (ed. & tr.), *Greek Lyric V* (The Loeb Classical Library, 1969)にも同じ番号 852 を付して収められています。